

4. 村落研究の課題と方法

蓮見音彦

昨年の村研大会における共通課題の論議の目標は、「現在の村落を把握する上で、重要なポイントとなるいくつかのことがらをとりだす」ことにおかれ、それを実証的に明らかにしてもちよることが、今年度の課題の論議に期待されていた。しかし、昨年の大会においては、そうしたポイントをとりだすことができず、したがつて今年に期待された作業を行うことはできなくなつた。この報告は、こうした目標にこたえようとする一つのころみであり、二つの方向か

ら「重要なポイント」を模索しようとするものである。

第一の方向は、いわば理論的な方向からのそれである。村落を把握する上で重要なポイントは何か、そしてそれを明らかにする方法はいかなるものかを考えるとき、当然それに先だって明らかにされおかれるべきものは、そこで村落の把握が、いかなる意義において、何を目標として行なわれるものであるのかということである。およそ村落についての把握一般のために重要なポイントというものは、ありえない。かぎりない要因の連関によって構成されている現象のうちから、把握の主体の価値判断にもとづいて、重要なものと、重要でないものがよりわけられ、そしてその重要なポイントについて、どの程度の詳細にわたってそれを明らかにするのかが定められるわけである。そのことを考えれば、村落社会研究の方法を論じるに先だって村落研究の意義——何のために村落の把握がなされねばならないのか——が明確化されねばならないこととなる。

しかし、村落把握の意義は今日まで必ずしも統一的にとらえられてはいないようと思える。それはまた、把握主体のことなるのに応じてことなりうるものである。そこでこの点を社会科学的認識としての村落研究について眼定するならば、おおよそつきのようになろう。社会科学的認識が、少くとも資本主義体制の下では、資本制社会の運動法則とその社会の止揚の契機を明らかにすることに重要な任務をもつものであるとするならば、村落研究も社会科学的なものである限りは、その一端を担うべきものとなろう。把握主体の内的動機において、こうした任務との関連を欠くものは、ここでの考察から除外せざるをえないであろう。單なる好奇心をはじめ、さまざまの実用的な意図にいたるまで、多様な把握主体の動機がありう

るが、それらを一緒にして重要なポイントを考えようとすることはいたずらに論点を曖昧にさせるだけの、全く非生産的なことである。かかる意味での限定をつけないかぎり、村落研究の課題も方法も明らかにすることはできないであろう。

もちろん、社会科学としての村落研究にかぎって議論するということにして、その中にもかなりの幅があり、このことがただちに村落研究のあり方を明確にすることにはならないことはいうまでもない。たとえば、資本制社会の運動法則を明らかにすることとのかわりの中でも村落をその考察の一環とするという場合にも、資本制のさまざまな段階に応じて、村落に関する明らかにされるべきことがからは異ってくるであろう。きわめて大ざっぱにいえば、歴史的関心と現在的関心の差がそこにはある。

眼定された中でもこのようにいくつかの差異を含むことを念頭におきつつ、ここでは現在の村落を把握することが社会科学的にもつ意義に即して、考察をすすめることとする。資本主義の最終の段階といわれる国家独占資本主義の段階における社会科学の任務が、この段階における資本主義の矛盾を明らかにし、体制変革の過程を具体的に示すことにあるならば、村落研究もまたその一環としての役割を負うこととなろう。その意味からすれば、現在的関心にたった村落研究は、社会変革における村落の意義を明らかにすることをもつてその意義とすることが要求されよう。それはいかえれば、村落が社会変革の推進においていかなる機能を果しうるか、また逆に変革の阻止と体制維持においていかなる役割を果すものであるのかを明らかにすることに村落研究の課題が設定されるということである。今日の村落を把握する上で重要なポイントというのは、まさ

に、村落についていかなる点を明らかにすれば上の課題に答えることができるのかということに他ならない。こうした見地から、現在的関心の下での村落研究の課題を把握されるべきポイントにまで分解するという作業が、共通課題に関する検討の第一の方向での作業となる。

これに対して第二の方向での作業は、いすれかといえば実証的なものである。村研大会の共通課題として方法の問題がとりあげられたことの中には、村落が変化してきており、その中でムラがどこまで解体し、どのように残存しているのか、それらを規定している要因が何であるのかを明らかにする上で、方法についての吟味が要求されてきたことがあった。それだけに、村落の変化についての実証的把握の中で、そのいかなる側面がどのような契機にもとづいて変化してゆくのかについて明確にしておくことが要請されよう。たとえば兼業化は村落によってどのような変化をもたらすのか、あるいはどのような条件の下で村落の結合が弱まるのかといった、要因の連関を客観的にとらえておくことがそれなりに必要である。それは、第一の方向からひきだしてきた理論的を仮説の客観的な検証にも役立つわけである。

この場合に考える必要があるのは、これまで村落研究において主として用いられてきた実証的な調査の方法が、いわゆる事例調査法であり、特定の集落を集中的に分析することによって、その社会構造の諸特質を解明するというものであったということである。この方法がそれ 자체としてすぐれたものではあることはあらためていうまでもないが、一つの弱点をもっていることも否めない。すなわち、個別事例について分析された事柄が、どの程度のたしかしさをも

つて一般化できるかということについて、たしかな保障がないということである。一般化という点では、いわゆる大量観察的な統計的調査法がすぐれている。特定時点における横断面をとりだし、その時点における事象の分布の概括的展望を得、その限りでの条件の差の影響を鳥瞰するには好都合である。これまで、村落研究では、各研究者が自己の調査体験などを媒介に特定事例から、一般化や条件の差による変化の展望などを示してきた。しかし、そこでいわれたことについては、客観的な検証を免なかつたといつても過言ではない。

この報告では、こうした点に一つの材料を提供する意味で、郵送調査による部落リーダーへのアンケートによって、部落の運営と部落をとりまく自然的・社会的条件との関連についての関連の検討を加えたい。もとよりこの調査はさまざまの限界をもつものであるが従来部落の把握においてとりあげられていた調査項目のいくつかについて、それをとりあげることの意味がどのようなものであるのかを、実証的な側面から検討することとした。それは、第一の方向で示す村落把握のポイントについての、実証的検討の一部でもある。これらの二つの方向での作業を通じて、現在の村落を把握する上での重要なポイントに到達する一つの手がかりを示したいと思う。

